金沢八景

鎌倉時代の栄華を受け継いだ緑に恵まれ潮香る町

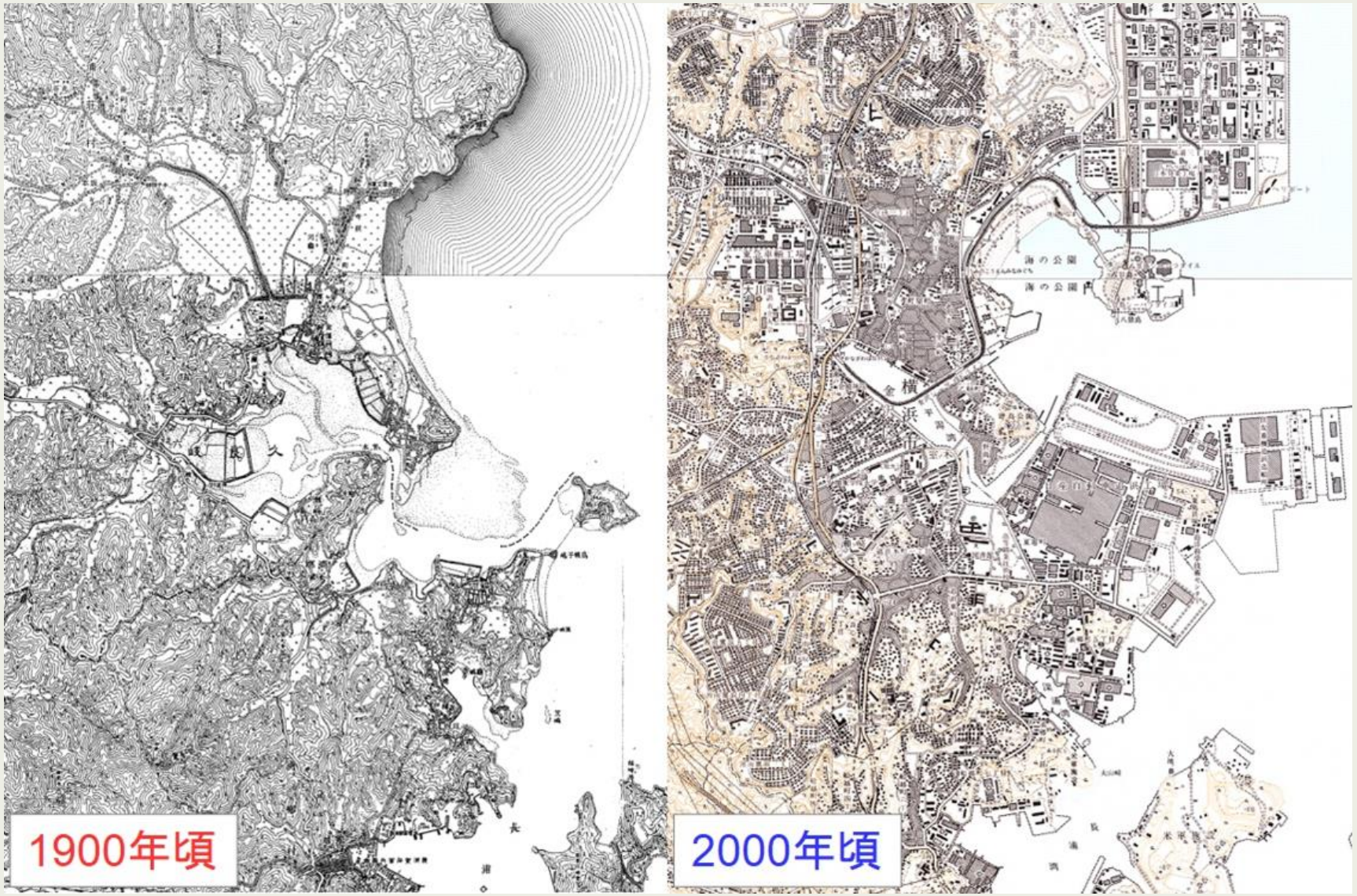
18N1140 吉田織希

金沢八景の名の由来である八つの景勝地

横浜金沢は江戸時代から埋め立てにより大きな変化を遂げた。

しかし街を歩いていると至る所に歴史の名残が刻まれている。

歌川広重によって描かれた８つの浮世絵とともに紹介をしていきます。



景勝地を描いた８つの浮世絵

「小泉夜雨(こずみのやう)」

「平潟落雁(ひらがたのらくがん)」

「内川暮雪(うちかわのぼせつ)」

「乙舳帰帆(おつとものきはん)」

「野島夕照(のじまのせきしょう)」

「洲崎晴嵐(すさきのせいらん)」

「称名晩鐘(しょうみょうのばんしょう)」

「瀬戸秋月（せとのしゅうげつ）」

1.「瀬戸秋月（せとのしゅうげつ）」

「よるなみの 瀬戸の秋風 小夜ふけて 千里の沖に すめる月かげ」

浮世絵に描かれている橋は瀬戸橋。
かつて橋の奥には平潟湾からさらに内側へ続く瀬戸内海、
または内川入江と呼ばれた入海が広がっていた。
江戸時代から埋め立てが始まり、現在は瀬戸橋の奥に内海が広がる景観を見ることはできない。

撮影場所と方向

1900年頃

現在

現在の入り江の最も奥の場所に琵琶島神社、道路を挟んで向かいに源頼朝が建てた「瀬戸神社」がある。
琵琶島神社は瀬戸神社創建時に北条政子が建てたもの。
当時は、瀬戸神社の前の海中にあり橋で結ばれていました。
参道の入り口には、源頼朝が瀬戸神社を参拝するために目の前の平潟湾で禊をした際、
衣服をかけた石「福石」が残されています。

瀬戸神社

琵琶島神社

2.「洲崎晴嵐(すさきのせいらん)」

賑へる 洲崎の里の 朝けぶり 晴るる嵐に たてる市人

瀬戸橋付近の松並木

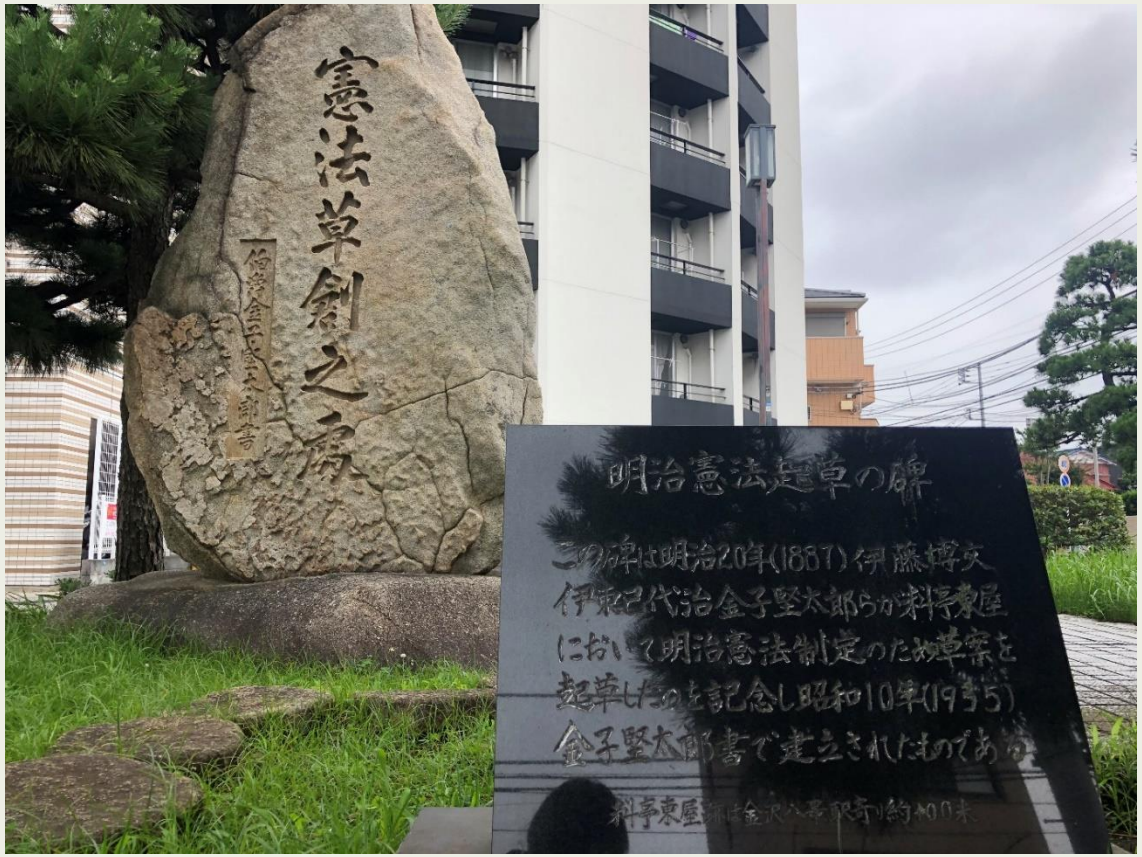
浮世絵の舞台、洲崎は名の示すように海に突き出した“崎”だった。
製塩が盛んで絵の後方には煎熬小屋が多数みられる。
現在、海岸は埋め立てられ崎は見られず、周辺には釣り船宿が並んでいる。

撮影場所と方向

1900年頃

現在

洲崎で有名なのは、”憲法草創の地”の石碑である。
明治２０年、伊藤博文を中心として夏島の伊藤博文の別邸にて明治憲法の草案作りがされていた。
別邸は現在の野島公園内に残されている。



3.「平潟落雁(ひらがたのらくがん)」

跡とむる 真砂に文字の 数そへて 塩の干潟に 落る雁かね

平潟での潮干狩りの様子

かつての平潟湾の入り江は大きく、江戸時代に泥亀新田として開拓され、
海岸付近は平潟塩田となり、塩製が行われていた。
浮世絵の手前の干潟では人々が潮干狩りをする様子が描かれている。
今でも潮干狩りで有名で、時期になると大勢の人々がこの場所に訪れる。

撮影場所と方向

1900年頃

現在

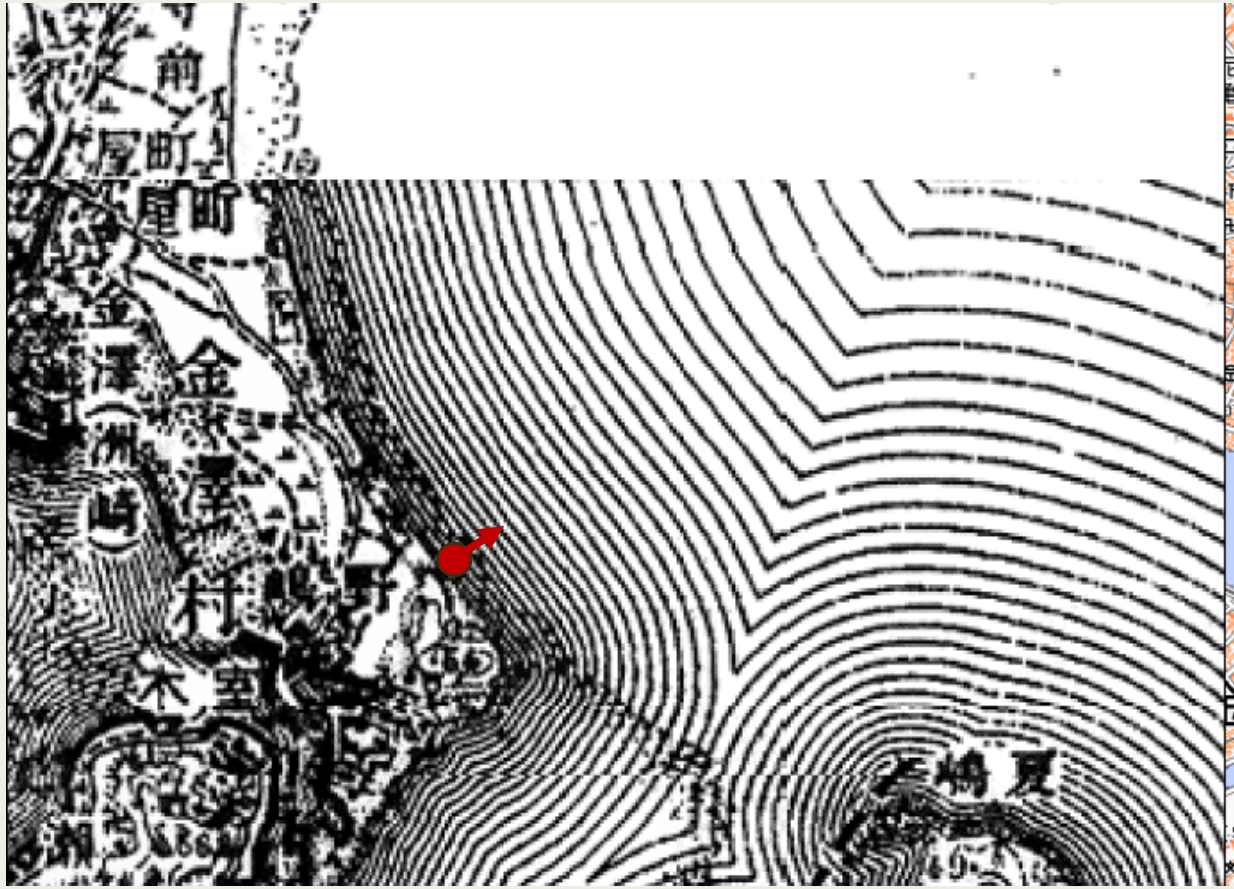
4.「乙舳帰帆(おつとものきはん)」

沖津舟 ほのかに見しも とる梶の 乙艫の浦に かへる夕波

野島公園から撮影
江戸時代には無かった運河があり、現在海の公園がある場所は海であった。
さらに下の地図から分かるように、八景島は人口島。

撮影場所と方向

1900年頃



現在

5.「小泉夜雨(こずみのやう)」

かぢまくら とまもる雨も 袖かけて 涙ふる江の　むかしをぞ思ふ

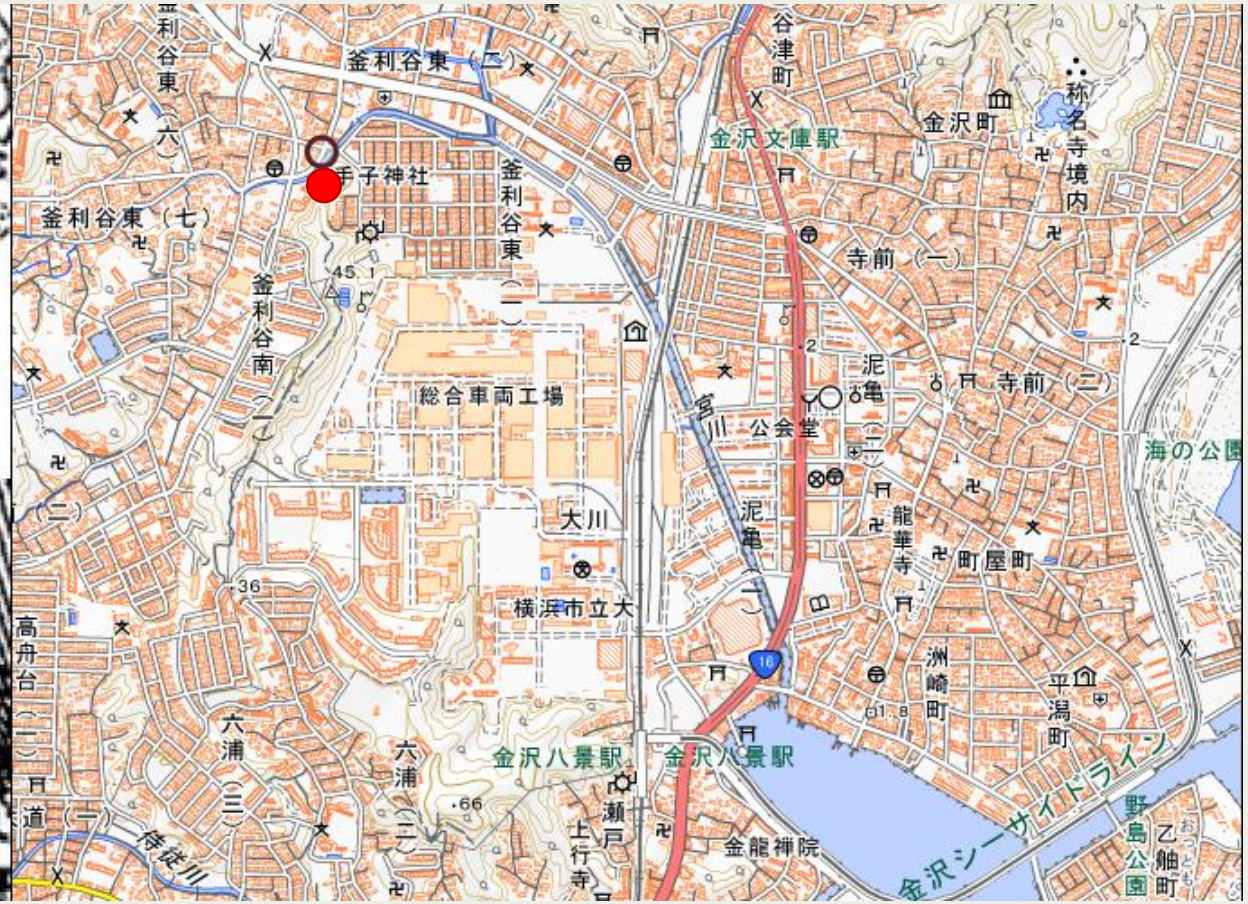
「小泉夜雨」

舞台は釜利谷地区の小手神社の付近とされている。
この付近はかつて小泉と呼ばれていた。
その名残から神社の前に設置されているバス停は小泉。
昔は小手神社の眼前まで海の入り江がせまっていた。

撮影場所と方向

1900年頃

現在



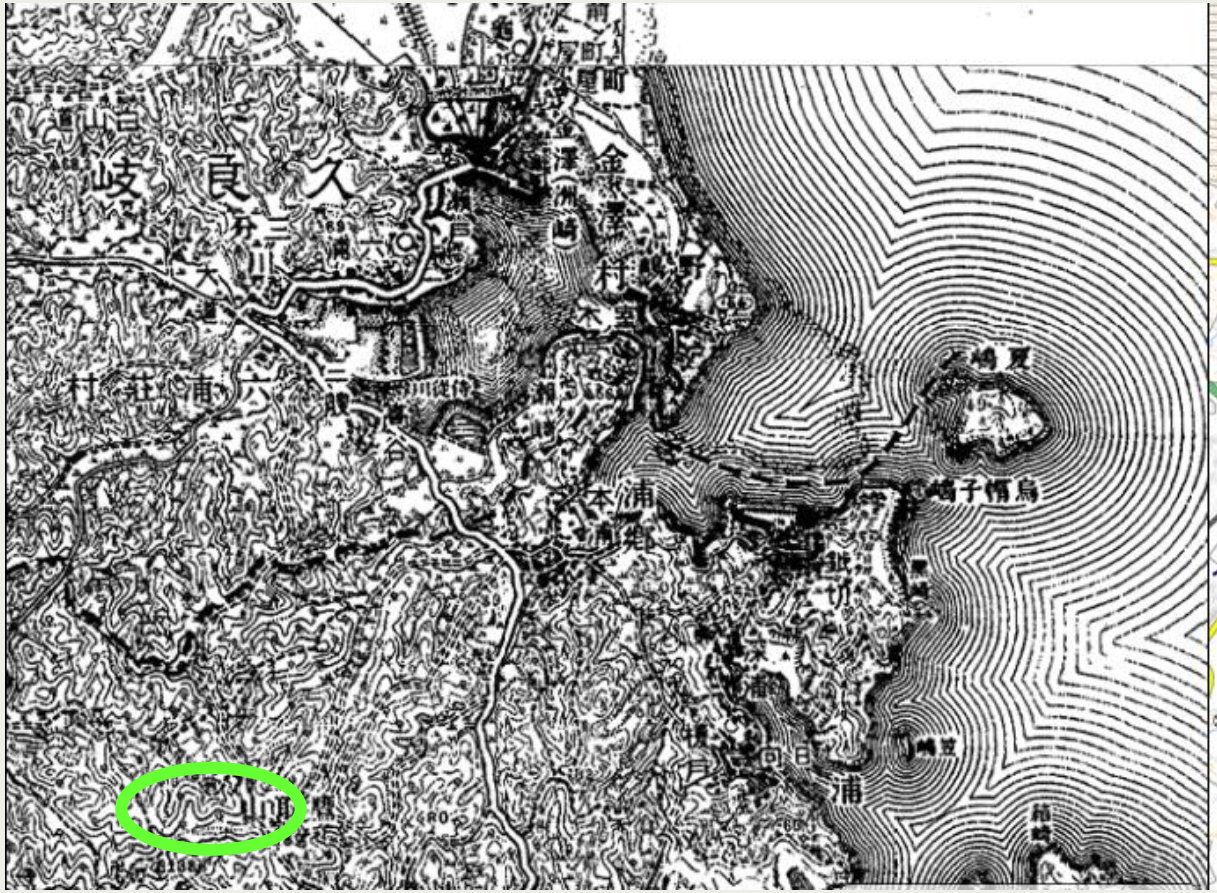
6.「内川暮雪（うちかわのぼせつ）」

木陰なく 松にむもれて 暮るるとも いざしら雪の みなと江のそら

今回の調査で「内川暮雪」だけは明確な場所が特定できなかった。
８つの浮世絵の中でも最もその描かれた場所に異説があるそう。
絵の後方にあるのは鷹取山であると推測され、おそらく洲崎や野島からの風景であろう。
歌川広重は、人から聞いた情景を絵にしていたとも言われるので、この絵に見える風景は
存在しないのかもしれない。

撮影場所と方向

1900年頃



現在

7.「野島夕照(のじまのせきしょう)」

夕日さす 野島の浦に ほす網の めならぶ里の あまの家々

浮世絵には、手前に観光船、奥は網船、観光と漁業の町の姿。
また、左に野島、中央に夏島、右に鳥帽子島が描かれているが
鳥帽子島は追浜飛行場建設時に削られた。
戦後の27年に3代目の夕照橋、60年に4代目として現在の夕照橋が架けられた。
夕照橋のたもとに昔の燈明台を模した橋のデザイン賞受賞の説明板がある。

撮影場所と方向

1900年頃

現在

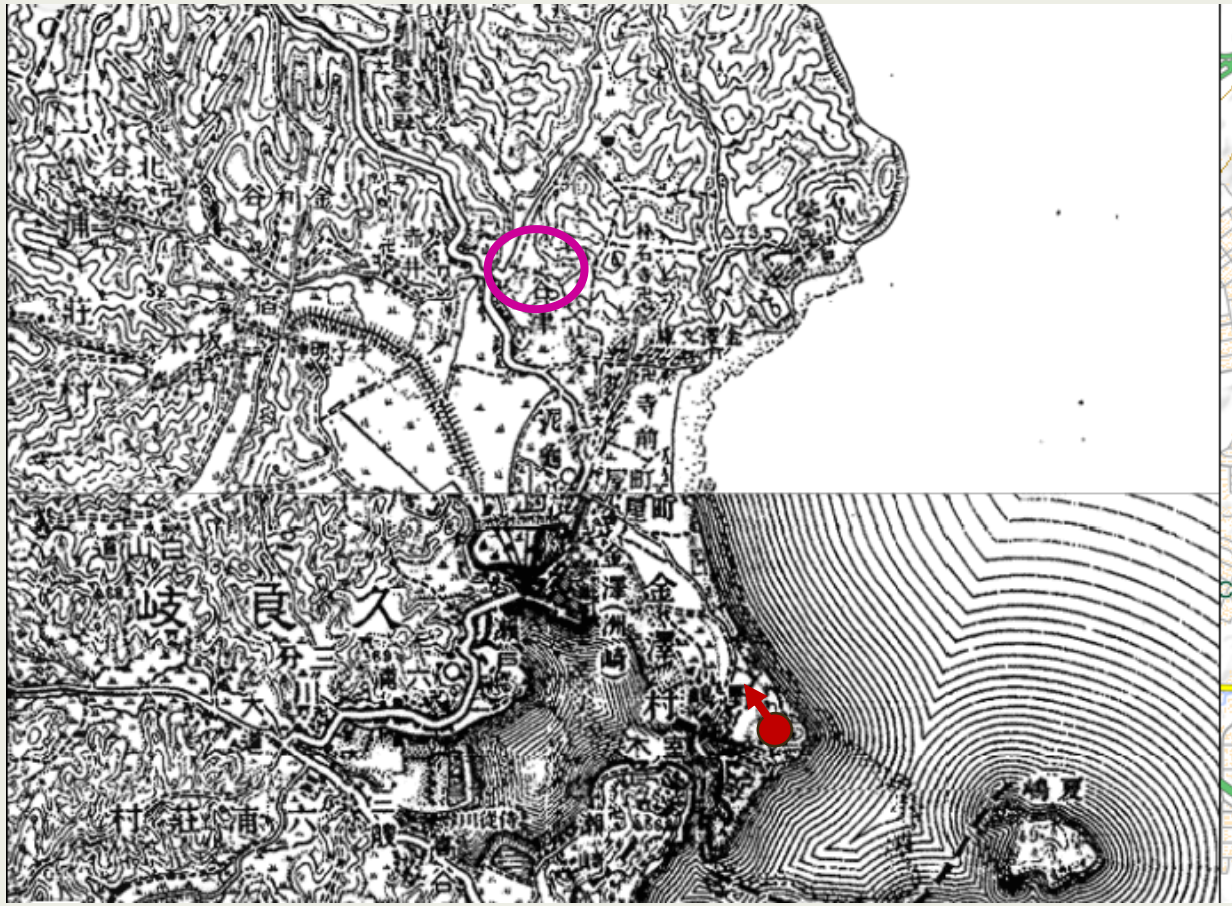
8.「称名晩鐘(しょうみょうのばんしょう)

はるけしな 山の名におふ かね沢の 霧よりもるゝ 入あひの声

当時、称名寺の手前まで平潟の内海が広がっておりその海上からの光景を広重は描いたとみられる。
称名寺は金沢北条氏の祖、北条実時（1224年～1276年）が開基しと言われています。

撮影場所と方向

1900年頃



現在

江戸時代から進められた埋め立てにより、かつて八景が存在した領域では水辺が激減した。
また、その水辺を囲んでいた山々も減少した。
しかし海の街・金沢としての価値は失われたわけではない。
埋め立てによって新たにできた『海の公園』や『八景島シーパラダイス』、古くから続く潮干狩りなどの漁業は現在も盛んである。
かつて平潟湾であった埋立地は現在、区役所、公民館など多くの行政施設が集中する街の中心部、生活拠点となった。
最近では再開発が行われ、行政施設の建替え、アウトレットパークのリニューアル、
金沢八景駅の大工事で京急線と金沢シーサイドラインが直結した。
このように絶えず変化してきた金沢は住む街としても、また訪れる街としても魅力的。
これからの進化がとても楽しみである。